

西川町の昔話

砂子関・月山沢

編 武 田 正

西川町の昔話

砂子関・月山沢

編 武 田 正

西川町の昔話

— 砂子関・月山沢 —

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
三枚のお札	人身御供 — しつぺい太郎 —	蛭神と馬	猿蟹合戦	サルカニ合戦	猿と雀	猿と雀	かちかち山	猿と蛙の寄合餅	かおすと狐	テデッポッポ	オタタカ鳥	オタタカ鳥	オタタカ鳥
三八	三六	三五	三四	三二	二六	二〇	一三	九	八	七	六	六	五
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
食わず女房	食わず女房	地藏浄土	地藏浄土	桃太郎	桃太郎	桃太郎	桃太郎	猿 聾	猿 聾	猿 聾	猿 聾	蛇聾入	法印と狐
七七	七六	七四	七二	七〇	六八	六六	六二	六一	五六	五三	四七	四四	四一

29	笠地藏	七八	46	酒吞童子	一〇九
30	笠地藏	八〇	47	大工ばなし	一一〇
31	笠地藏	八二	48	砂子関の狐	一一一
32	鶴女房	八三	49	大淀大明神 ― 四ツ谷 ―	一一一
33	雪女房	八四	50	刈り上げ餅	一一四
34	栗福と米福	八五	51	狐に化かさつた話	一一四
35	まま子いじめ	八七	52	マキ粥	一一五
36	甘酒	八八	53	ばんば風	一一六
37	和尚と小僧	八九	54	鮭の介、今ここ通る	一一七
38	フウフウとドイドイ	九一	55	長いはなし	一一七
39	馬鹿聲	九三	56	長いむかし	一一八
40	団子聲（お針の師匠さんから聞いたもの）	九五	57	果なし話	一一九
41	屁たれ嫁	九六			
42	屁たれ嫁	九八	凡例		
43	法印と医者と軽業師	一〇〇	附記		
44	股大根の由来	一〇七			
45	大黒さま	一〇八			

凡 例

- 一、昭和50年8月4日より9日までの調査である。
- 二、テープコーダーにとつたものを翻字したものである。
- 三、本調査は県教育委員会実施のものである。

1 オタタカ鳥

兄が目見え^{まなく}なくなつて、それで弟が養つて、毎日毎日、芋掘つて食せつた。

ところが、オジの方がアツコばり食べて、兄は中のええどこばり食べらせだげんど、それでも、ほういううまい奴ばり自分が食つてると思つて、兄の方が、

「おれちや、こだな食せで、まだうまいもの、弟が食べてるんだべ」

ほして弟ば殺すんだな。ほんで鳥にさつてしまった兄は、

弟くやし 弟くやし

て、鳴くんだつて。

(砂子関・工藤 馨)

2 オタタカ鳥

兄が弟を殺して、へ自分ばりうまいもの食って、おれさうまいもの食せね〜と思つて、殺して開けてみたら、何もうまいものも何も食ってねがつたがら、

弟くやしい 弟くやしい

て、鳴くんだど。

(月山沢・遠藤つるよ)

3 オタタカ鳥

とんとむかしあつたどな。

兄と弟と居て、ほうして弟が兄ち^{あん}やさ、うまいどこばり残してで、アツコの方ばり自分が食つたんだべ。兄が弟ばりうまいもの食ってんの、んねがて、弟ば殺し

て腹の中見だら、ほしたらアッコばり食ってだんだけど。んだから兄は弟のこと、

弟くやし 弟くやし

オタタカ鳥

て鳴くのだど。弟の方は

アッコ アッコ

て鳴くなだど。どーびん。

(砂子関・工藤あきえ)

4 テデッポッポ

テデッポッポーて、「ポー」までつけて鳴くと天気が悪いし、「テー」でとめつど天気ええのだど。

(砂子関・工藤あきえ)

5 かおすと狐

狐がかおすのどこに行つて、御馳走になつたど。ほんで狐も、

「ほんでは、こんどおれが御馳走すつから」

ていうたげんども、魚の穫りよう知しやねもんだから、かおすに聞いたど。ほしたら、

「尻尾おっぱ、寒い晩に、川さ漬けておくとええ」

て、教えらつたど。したれば魚とんねで、尻尾おっぱ、しみではあ、つんと力出したげんど、動がねぐなつたど。

(月山沢・遠藤あさえ)

6 猿と蛙の寄合餅

猿と蛙、餅食^{びつき}だくて仕様なくて、猿と蛙あ相談したど。

「あの、餅なんとかして持つてきて食べる工夫ないか」

て、相談した、猿と蛙はな。猿は、

「蛙もさ、蛙もさ、何かうまい ないがえ」

「いや、あだな持つて来るえ（来れる^こ）。お前さえもあれば、大丈夫だなえ、猿もさ」

「ようし、んだらばお前、何かうまい方法あつか」

「ある、ある。裏の溜^{ため}さ、おぼこの泣き声上げて、おれが溜さ入っから、あそこの家に子どもがいだはげ。そのうち、お前、餅搗いっだな背負え。ここまでな。ほうすればこいつあ確かにうまく行く」

「ほだなごんだら、雑作ね。おれあ背負ったな、ほだな、あそっから荷縄^{たが}持つて背負うから」

「よし、んだら、ほうすんべ」

て、蛙はピタリ、ピタリ、裏の溜さ入って、小さなおぼこの泣き声、オギヤアオギヤアて、溜さ入って泣ிட்ட。ところが、

「ほれあ、おぼこ、溜さ入った、んねが」

ていうわけで、餅搗きやめで裏の溜さ行って一生懸命かましたげんど、居ね。

「なんだて、いね」

蛙はそのうちピョンと跳ねて、ほしたら、

「なんだ、蛙だ、こりや」

ていうてるうち、猿もさ、荷縄持^たって臼がらみ高いどこさ登ったって。そしたら蛙もピクタラ、ピクタラ、その後登って行っただ。したら裏の高い山さ登ったところが、猿は高い山まで、やくさら（わざと）登って、たいがい蛙登ってきたかって、木さ登って見っだっけ。そうしているうちに蛙は後から追っかけて行っただ。

「あありや、こわい、こわい（疲れた）」

「何、蛙もさ、こわいなて、おれはまだこわがった」

ていうわけで、上さ登っていだっけ。ほうして、

「ええがったなあ、まず、猿もさ、んだれば分けて食べたらええがんべ」
て、蛙いうたど。ところあ、猿賢い猿だから、食せつだくない。蛙さ、

「蛙もさ、蛙もさ」

「何だ」
なえ

「ん、おれあ、こっから臼、こいつ餅入ったまんま、まぐっから（転がすから）
早い人勝ちで、早く追つかつた人が食うこ、すんべなあ」

「ほだごと言^やねで、食せてけらしやいちや。おれなの少し食うど、たくさんだ
から」

「いやいや、ほだごと行かねっだな。まぐった方がええっだな」

ところで、臼まぐってやつたと。臼だし、高いところからまぐったもんだから、
飛ぶようにまぐっでしまった。猿は早いから、臼さそのまま追つかつて行った。
ところが蛙は、ほれ、

「あの、猿もさ、ずるすけ、ほに。おれが行がねげば、餅なの食んねのに」

て、ピクタリ、ピクタリ跳ねてきた。ところがほれ、餅あちよつと行つたればすぐに下き落つてだていうんだな。ほうして猿は臼さ追っかけて行つて見たげんど、餅あさつぱりふつついでいね。

「ほりや、大変だ」

蛙はすぐ後行つて、餅見つけて、デグデグビリと食つていだつていうんだ。ノドふるわせて、腹くつつくして。

ところが猿もさ、間もなく登つてきた。ほして、

「いやいや、いやいや、蛙もさ、悪れがつた。おれちやも分けて食せろ」

「いや、お前、臼でも舐めでいんだ。おれの言うこと聞かないで、お前ちやなの食せらんね」

んだげんど、こだえいっぱいあんのだし、一人では食んねしなあ。

「分けて食せで呉ろちややあ」

「ほうか、ほだら尻けつ向けろ」

蛙は冷ひやった手で餅の中のあついでこ、尻さビダツと。さあこんど尻毛さ餅ぶつ

つけらっで、ひつついで、「あっあつい、あつい」て、むしって食ったげんど、尻の餅、なかなか取んねがったんだど。まびっでしまつてな。ほうしてやつとのこと、へがして食べた。んだげんど、まだ食だいていう。

「また、ええか」

て、あついでこ中からとつて、ベダツとぶつつけてやる。

「あつつい、あつつい、うまい、うまい」

そのうち、猿の尻は真赤になつたど。んだからずる賢いことすんなという話だど。どーびんさんすけ、さるまなぐ、さるのけつつはまつかつか。

(砂子関・工藤 馨)

7 かちかち山

むかしあつたけずもなあ。

じんつあとばんちやいだけど。じんつあ、毎日豆植えで、

一つぶ植えたら千になれ

二つぶ植えたら二千になれ

三つぶ植えたら三千になれ

て、ほれ、じんつあ植えでつど、狸畜生、出はつてきて、

一つぶ植えたら くっされろ

二つぶ植えたら 流れろ

三つぶ植えたら おれあ食う

て、「この畜生」なて、じんつあ、追^ほうていうなだど。追つて行ぐずど、逃げて行ぐていうなだど。逃げて行つて、すつどまたじんつあ、

一つぶ植えたら千になれ

二つぶ植えたら二千になれ

三つぶ植えたら三千になれ

て、毎日続けっけんども、やっぱり狸畜生きてわかんねて。

「なぜかこないんだか」

て、石の上さ、じんつあ考えて、モツチこしやえで、

「ばんちゃ、ばんちゃ、狸きてわかんねだはげて…」

て、ばんちゃと相談して、モツチ持つて行つてだど、石の上さビダーツて塗つていだんだど。そしたら、ガサガサ、ガサガサときて、石の上さきて、

一つぶ植えたら くっされろ

二つぶ植えたら 流れろ

三つぶ植えたら おれあ食う

ていう。じんつあ逃げられつど思つて、一、二、三度かまねで植えつだていうなだ。はいつ今度いまいましくなつて、

「この畜生」

ていうたれば、狸はモツチではあ、石さびつたり、ふつついてはあ、逃げらんねぐなつたどこはあ。ほしてじんつあ、せめて来たていうなだな。生捕りして来たどはあ。縛つてなあ、縄で縛つたかツルで縛つたか、家さ来て、

「ばんちゃ、ばんちゃ、狸せめてきた」

ばんちゃは、

「はいつあええごんだなあ、ほんでは狸汁、御馳走なるいったな」

て、一生懸命、ばんちゃ、麦搗きしたつけたんねがや。

「晩げは麦飯、狸汁。トンカエ。晩げは麦飯、狸汁」

て、搗いっただていうなだ。ほして搗いっただれば、ほれ、そいつ聞いて狸はぎりぎり縛らっただげんど、

「ばんちゃ、ばんちゃ、少しここ足痛いから、ゆるめて呉ねが」

「お前、狸などゆるめらんね。逃げられつど、悪れ。じんつあも居ねどき」

「逃げで行かね、足痛くて仕様ない」

「駄目だ」

ていうげんども、晩げ狸汁にされるんだから、あんまりむずこくて（かわいそうで）、少しゆるめで呉だれば、グイグイとしてはあ、解いではあ、いきなり杵をとって、ばんちゃば殺したんだとはあ。杵で叩いではあ。ほして知しやねふりし

て、ばんちやば埋めてきてはあ、ばんちやに化けで手拭かぶっていたど。じんちや来たれば、ほれ、ちゃんとばんちやの肉料理していたんだど。そしてじんつあ来たらば、ちゃんと狸汁こしやつて御馳走こしやつていだていうなだ。

「なんだか、しなこいな、ばさま」

「うん、しなこいっだな、狸だな」

ほしてこんど食つてで、一杯飲んで酔ったてだな。ばんちや踊りおどつたてだな。ほして踊りおどりながら、

狸汁食うどて　　ばば汁食った

狸汁食うどて　　ばば汁食った

て、狸は言うなだど。ほうしたればじんつあ、

「なえだ、こりや」

ていうけあ、逃げて行ったんだどはあ、狸は。ほんでは化^ばやがさっだんだ。ばんちや殺さっでだんだて。そこらうち見たれば、やつぱり着物はあるし、ばんちや殺さっだんだど。ほして、じんつあ困んべずねえ。泣いっだれば来たていうな

だ、兎。

ほしたれば、

「おれ、仇とつてけらんね」

どて、兎は考えて、狸どさ行つて、

「狸どの、狸どの、山さ行つて柴伐りすんべ」

て行つて、

「おれ、少し柴伐したな、狸どの、背負つて呉^けろ」

途中まできて、ほしてこんど、

「何か、おれ、腹いたくなつた。おぶつて呉^ろ」

狸は、

「なえだ、ほんでは困つたんだな。ほんではおれの柴の上さあがれちや」

て、おぶつたていうなだな。ほして来つどきていうんだ。柴さ火つける勘定し

て、火打ちでカチカチつて。

「なえだ、兎どの、何だや、何すんのだ。何かすのであんまい、煙草でものむか」

「んねえ」

「なんだべ」

ているうち、火点けで、どんどん燃えだてなだ。チュルチュル、チュルチュル
ていだけあ、どんどん燃えだていうなだ。

「こりやこりや、火燃えだ」

なているこめ（いるうちに）、どんどん燃えて背中燃えだていうなだ。

そしてほれ、兎は何かええ薬ないべかて狸から言わっだど。それで南蛮粉入っ
だ薬つけてけだなだど。

今度、ええぐなっだてだな。ほして、

「舟でもこしやつて、どさか湯治でも、遊びでも行くべ」

て、兎ばだまして言うなだな。兎は、

「おれなはええげんども、狸どのは力あっさげ、壁土でが。おれなは、狸どのみ
たいに力持ちでないはげて、板っ端で杉舟だはあ」

なて、こしやつたてなだなあ。ほして兎は、

杉舟はツエン 釜土舟はゴグラ

杉舟はスウー 釜土舟はゴグラ ゴグラ

て、ゴグラ、ゴグラている。

「ありやりや、なえだ、なえだ」

ているうちに、狸はスブズブ、ズブズブと沈んで行って、仇とらっただけで。
兎にな。んだはげて、ほだな悪れごどさんねずなあ、ほれ。どーびんさんすけ。

(砂子関・悪七)

8 猿 と 雀

とんと昔あつたけずまなあ。

おらえの軒先さ、雀、卵産したけど。ほうしたれば雀どの、喜んで卵産して、
チヨロンチヨロンで鳴いっただけど。ほうしたところが猿畜生、ほこらえ居で聞

きつけて、

「なになに、卵産した」

て来たど。ほしたら雀あ、えらい喜んでチヨロンチヨロンて鳴いっだどこさ、猿が聞きつけて、

「卵なしたな、おれさ一つ呉ろ」

「ここの卵、おれな子どもだも、呉らんねえちや」

て言うたらば、

「ほだごと言うごんだらば、南蛮味噌つけて、お前がらみ吞んでしまう」

「ほだれば仕方ない、おれも食べられっごんだらば、呉っ^けこではあ
て、一つ呉だ。ところあ三粒産した卵^けだけど。」

「ほんでは、ほれ、一粒、んだら呉っこではあ」

て、呉だれば、何、ちよいら口さ入っでカリゴリ、カリゴリ、ウツと吞んでしまっ^けたつてだ。ところが、

「うまい、うまい、うまい、いま一つ呉^けろ。三つあるった、んねが、いま一つ、

呉ろ」

「こだな、二つとか無いなだも呉らんね」

「ほだごと言うごんたら、また南蛮味噌つけて吞むぞ」

猿あ言うたど。

「んだれば仕方ない、また呉っこではあ」

て、呉だ。ところあまたちいら口さ入っで、カリゴリ、カリゴリ吞んだ。ところ
が、

「ああ、やあ、うまい、うまい、うまい。どうせこうせ、みな呉ろはあ」

「何、何、ほだごと言うど、ニサ（お前さん）がらみまた南蛮味噌つけて吞むぞ」
そういつたところあ、

「んだれば仕方ない、みな呉っこではあ」

て呉た。ところがまた口さちよいら入っで、カリゴリと吞んでしまった。

「ああ、うまいがった、こんど無くなったら、行んこんではあ」

猿あ、ほれ、行ってしまった。ほうして、雀はチョロン、チョロンて鳴ிட்ட

ていうなだ。ところあそこに一番早く聞きつけて来たのは栗だて言うんだね。

栗あ、

「雀もさ、雀もさ、なして、ほだえ泣きやる」

てきたんだて。

「雀もさ、雀もさ、なしてほだえ泣きやる」

て来たんだて。

「猿もさに、雀の卵、みな取られ申した、チョロン、チョロン」

て泣いっただ。ところあこんだ、牛のビタクソ来たていうんだな。ビダリビダリと来た。

「雀もさ、雀もさ、なしてほだえ泣きやる」

ていうたれば、

「いやいや、いや。猿に卵、みな取られ申した、困ったことでました。チョロン

チョロン」

「よしよし、おれあ仇とって呉る」

ほうしたところが、こんど餅搗く臼、はいつあゴロゴロ転んできたていうんだな。

「なしてほだえ、雀もさ、雀もさ、さっきだから、おれ聞いてる、ほだえ泣きやる」

「猿え卵、みな取られ申した」

「いやいや、猿ちくしょう、ええぐない畜生だ、おれ仇とって呉つさげ、泣きやんな」

ほうしていたところが、こんどは、ぶーんて何だと思つたれば蜂だていうんだな。

「雀もさ、雀もさ、なしてほだえ泣きやる」

「いや、猿に卵みな取られ申した。なんぼ泣いだても足んね^たごんだ。チヨロン、チヨロン」

て泣いでる。

「よし、よし、おれあ仇とってけつさげ、泣きやんな」

したところが、こんどあ、猿もさ、ほれ、向いさ川漕いであっちの方さ行つていたど。ところがほれ、こんど、蜂だの、臼、栗だ、

「何とかして仇とつてやる」

て、相談した。ほうして向いさ行つて待つでだていうなだ。猿の家さ来て待つでだなだど。

ビダクソあ来つどすべつてころぶように、戸の口さ。こんどあ臼あ屋根の上さあがつて、ほうしてぶんぶん味噌桶どこさかぐつて待つてだてな。栗あ火焚く囲炉裏の中さかぐつていだつていうんだな。ほうしていたところが、

「ああ、さむいさむい、さむい。なんだて川漕いできて寒くなつた。火焚いで当んべ」

て、ごもごもて焚いてたところが、栗あ囲炉裏の中さ隠つてだ。どーと燃えたわけだ。ところがほの栗がバーンと、きんたまさはねだてな。

「あつい、あつい、あつい」

て、水飲みさ行つて、こんど味噌つけんべと思って、ところが蜂がきて、ジュ

グジュグ刺さった。

それから蟹もいた。水さきんたまうるかすど、蟹あきてはさむなだな。そして、
「これあ、とてもいらんね」

というわけで、逃げらんねていうわけで、戸の口さ行つて、がらり戸を開けて、ほうして逃げたところが、牛のビダクソあるもんだから、すべつて、ズルリすべつたど。その上から餅搗く臼落ちてきた。ほして仇とらっただけど。んだから悪いことはするもんでないど。どーびんさんすけ、さるまなく、さるのけつつはまっかつか。

(砂子関・工藤 馨)

9 猿 と 雀

裏の竹林さなあ、卵産したけど。ほして雀あ卵三つぶ四つぶも産したけべな、

ほれ。ほうして大事にして、チヨロン、チヨロンで大事にして男雀あ、食せて大事にして温めていんなだけど。

ほだずど、裏から猿ちくしよう、ガサガサ降^おつできたど。

「その卵、雀どの、雀どの、卵一つくれさい」
というけど。

「三つぶばりの卵、呉らんねえ」

「呉ねがら、南蛮味噌つけて飲んでしまうぞ」
というけど。

「んだら、呉っこでやあ」

て。呉んなだど。ほして雀、がおつてはあ（がっかりして）、

「三つぶばりの卵とらっじや、チヨロン、チヨロン」

て、鳴いでいっけどはあ。ほうして猿ちくしうは来んなだど。ガサガサ、ガサガサ。

「雀どの、雀どの、卵一つ」

「ほだえ、ほだえ呉らんね。二つぶばりな呉らんね」

「呉ねがら南蛮味噌つけて飲んでしまうぞ」

て、また言うなだど。ほして南蛮味噌つけて飲まれつど恐つかないもの、呉^けだべ。ほしてまた呉^けだんだど。二つぶばりな取らつで、一つぶしか無くてはあ、雀はチョロン、チョロンで鳴いでいっけどはあ。

ほうしていだば、また来たていうなだ。

「一つぶばりな呉らんね」

「あそこ、堰はねつどて、落としたはげ、また呉ろ」

て来たんだど。ほうしてまたとうとう取らつじやんだど。雀は取らつで、チョロン、チョロンで鳴いっだんだどはあ。ほしたれば、猿ちくしうはガサガサ、ガサというて行つていだれば、丁度、臼あきて、

「雀どの、なして泣きやる」

「猿え卵とらつだ、チョロンチョロン」

「おれ、仇取つて呉^けつさげ、泣きやんな」

て言うたんだど。そして臼あゴロゴロ行つたんだど。ほうしたばブーンと蜂あ
とんできたんだど。ほして、

「雀どの、雀どの、なして泣きやる」
ていうたど。

「猿え卵とらっじゃ」

「おれ、仇取つて呉つさげ泣きやんな。」

ほしてとんで行つたんだど。ほうしたればこんどあ、チュクチュク、チュクチュ
クて音すつさげ、なえだと思つたらば、着物ぬう針だけど。ほしたれば針も言う
なだど。

「雀どの、雀どの、なして泣きやる」

「猿え卵とらっじゃ」

「おれ、仇取つて呉つさげ泣きやんな」

ほして、針も行つたんだどはあ。ほしてチヨロン、チヨロンて…。
こんどあなあ、蟹来たつてなだ。蟹はヨッコ、ヨッコと来て、また、

「なして泣きやる」

「猿に卵取らっじや」

ていうたらば、

「おれ、仇とってやる」

そして蟹も行ったんだとはあ。チョロン、チョロンで鳴いっただれば、こんどはよ、ビダラビダラ、ビダラて音すんなだけど。ビダクソ来たなだと。

「雀どの、雀どの、なして泣きやる」

ていうただけど。

「猿に卵とらっじや」

「んだら、おれ仇とって呉^けっさげ、泣きやんな」

雀どの喜んで、チョロン、チョロンていたら、ビダクソ行っただけどはあ。

ほうしたれば、みんなで相談したなだけど。ほして相談していたら、トチブもコ

ロコロ、コロコロて来たんだど。ほして来て、相談して、

「なぜして仇とったらええがんべ」

ていうならば、臼は屋根の上だど。ビダクソは戸の口の、猿あ歩くようなどこさ。蜂はサマもとき居て、針は布団さささって、蟹は水舟にいて、トチプは囲炉裏の中さ入った。猿ちくしょうあ来て、どんどん、どんどん火焚いて当つていたんだど。当たつていたれば、トチプはバーンとはねだんだど。ほしたれば、

「あち、あち……あつくてあつくて、わかんね。わかんね」

て、布団の中さもぐって寝っだんだどはあ。ほうしたれば針はチュクチュク、チュクで、「ああ、いたい、いたい、いたい」

サマもとき行つてみんなと思つて見だれば、こんどは蜂はブーンと飛んできて、ジュグジュグ、ジュグジュグ。

「ああ、いたい、いたい、いたい。水でも洗つて」

て、水舟さ行つたれば、こんどは蟹が食つついたんだど。そして離さねなだど。

「ああ、こだえしていらんね、こだえしていらんね、どこさか行つてみらんね」

どて、逃げて行つたれば、戸の口さ行つて逃げて行かんねと思つたらば、つるつとすべつて転んだんだど。ほこさ上から臼落つできて、猿ば退治して呉^けだん

だど。ほして猿は卵とった罰あ退治さつじやんだどはあ。とーびんさんすけ。んだはげて、ええぐないことさんねず、ほやんばえ（そういうように）仇とられっさげな。

（砂子関・悪七）

10 サルカニ合戦

むかしあつたけど。

猿とカニがあつたけど。ほしてほに、猿は柿の種子もつて、カニの方はおにぎり持って、交換しろて言^やつて、交換したどこだけずな。

ほして、カニが柿の種子植えでよ、

早く芽を出せ 早く芽を出せ

て、水をかけて、育^{おが}したど。ほうして大きく柿の木おがつたど。柿実^なつたれば、

柿を猿が見つけで、そして来て、

「ほの柿もいできる。んだはげ、あたしにも食せろ」

て、猿言うどこなよ。ほして柿の木さのぼって自分ばりうまいどこ食って、カニには青いどこぶっつけではあ、カニをいためだど。カニが泣きながら帰って行つてはあ、蜂など栗など、臼など行き会って、

「何して泣ிட்ட、カニさん」

て聞いたれば、ほれ、わけ語んなだけ。

「猿にこうさつではあ」

てよ。こんど、みんなで猿の家さ、「仇とってける」て行つて、猿、山から帰つて来んな待ちでそしてそこさ猿帰つてきた。栗は火所ほどの中さ入つて隠つてだし、臼は屋根の上さのぼって隠つていだし、蜂は味噌瓶の中さ入つて隠つてだなてよ。
「さむい、さむい、おおさむい」

て、猿は来て、火焚いで当たつたれば、栗は跳ねできて、あつくさせだなてな。ほして、あつくしたとき味噌つけつどええて言うはげ、味噌ガメの蓋とつたれば、

蜂出てきて、蜂に刺った。

「こういうときは、家になのいらんね」

て、逃げだれば、上から臼落つてきて、つぶさつて仇とらつじやはあなて。ほんでどーびんだ。んだからいじわるさんねもんだど。

（月山沢・遠藤あさえ）

11 猿 蟹 合 戦

猿が柿の種子拾って、蟹のヤキメシと取っかえっこして、蟹は種子植えだど。ほしたら柿の木たちまち大きくなって、柿実^なった。ほして柿実^なったら、猿は柿とつて呉るきて、赤い柿を自分で食って、青い柿、蟹さぶつつけたど。

ほしたら、栗、蜂、臼、ビダクソ、小ガニと針がきて、みな集まって相談したど。みんな猿の家さ入って、栗は囲炉裏の口さ隠つてで、ミソ桶に蜂、水舟に小ガニ、寝床に針、戸の口にビダクソ、屋根の上に臼がかぐつでいたど。

猿は帰ってきて、囲炉裏の中かき廻したら、栗がはねだ。猿は熱くて火傷したやけどがら、味噌桶さ行って手入れっど蜂が刺したど。

「いたたた…」

て、水舟さ行ったら、小ガニが水舟で猿をはさんだ。ほして、こんでは駄目だと床の中さもぐったら、針がチクリチクリと刺すわけだ。ほんでこりや駄目だて、戸の口から逃げっど思ったら、牛のビダクソにすべって転んだ。そこさ、屋根の上の臼落っできて、そして仇とらっただど。

んだから悪れごどはさんねなだ。どーびん。

(砂子関・工藤あきえ)

12 蚕神と馬

蚕の頭のどこさ、馬の足跡あるていう話があつた。三つある跡のうち、前さあ

るやつがお姫さまのカムリだていう。

(砂子関・工藤 馨)

13 人 身 御 供 ― しっぺい太郎 ―

とんと昔あつたけずまなあ。

ええ娘いっど、人身御供ていうて、上げらんなねなだけど、娘。ほして娘、ほ
れ、ええ家の娘一人ずつ、ずうつと上げらんなねなだけど。ほうして一人々々上
げらんなねくて、こんど旦那さまの娘さ当たれば、ほこの旦那さまの家で犬い
だんだけど。んだずど、ほこの家で、はいつば連て行つて、お寺さま拝んでけつ
さげ、んだずと退治して呉つさげて、連で行つたんだだけど。

そのお寺さま、拝むずど、その犬は三河の国のしっぺい犬郎と名ついたんだ
けど。

エーポッポ タッポッポ

三河の国の五木橋の

しっぺい太郎

あのこと このこと

聞かせて下さんな

て、そのお寺さま、拝むなだけど。んだどはいつ出はっど、人身御供に上げっ
だお姫さま、化けもの連て行くなだけど。んだずど、しっぺい犬郎という犬あか
かつて行つて退治したんだだけど。

大きな狼だか何だかの化けものだけど。ほれ、ほれから、出はんなくなつたん
だけど。ほこの家のしっぺい太郎という犬、はいつ退治して呉で、ほこの村で娘
上げねつたて、ええぐなつてはあ、ほの犬、大事に育さつたなだけど。

どーびんさんすけ、さるまなぐ、さるのまなぐさ毛が入つて、けんけん毛抜き
で抜いだれば、めんめんめつこになりました。

(砂子関・悪七)

14 三枚のお札

むかし、ずうつと奥山さ行つたところが、道に迷つて、ほしたれば暗くなつたんだ。こんど、どつちやもこつちやも行かんねくなつたんだ。ほして見たれば、向うにかすかに灯りが見えたというんだ。んだはげ、ほこさ行つて、

「こんばんは、こんばんは」

て行つたれば、ばんちや一人ばりいだんだけど。火焚いて當つていだんだけど。

「こういうわけで、来たんだげんども、まず、道に迷つてきたはげて、一晚泊めてけねが」

て言うたんだ。

「んだら、泊まれ」

と、こうなつて上げだんだけど。ほしてゐるうちに夜中になつたれば、ちよえつと変だ。ちえつと起きてみたれば、かげでものすごい口になつていだんだけど。「これは困つたもんだ」

て思つて、その野郎こが一生懸命で、なぜして逃げたらええがんべと思つてみだげんど、逃げっどこ無いなだていうなだ。

ほしたら、便所の中からくぐつて逃げた。んだれば追っかけらんねて、一生けんめい、

「小僧、待てろ。小僧、待てろ」

て、声かけて追っかけだんだど。

さあ、こんどそのばんちや早いもんで、小僧遅いもんで、いよいよ遅くなつて追っかけられてしまいそうになつた。ほうしたらばいつでも肌身につけっだお守りさま、三枚持ったていうなだな。その小僧さんがうしろさ、

「砂山になれ」

て、投げだんだど。ところが砂山が山ほどになつて、登っどツルリ、登っどツルリして、やつと登ったんだど。

そのうち、小僧は一生懸命走つて、向こうさ逃げて行く。また追っかけらつて、いよいよ追っかけられっどこだ。そしたらうしろさ、

「大川なれ」

て、投げっど、ものすごい川になって、そしてまた行っけんど、追っかけられて、またうしろさ、

「大火事になれ」

て、投げだんだど。ほうしたれば火の海になったんだど。

ほうしているうちに、また鬼は追っかけてくる。

「小僧待つでろ、小僧待つでろ」

ていわっだんだど。ほんどき五月の節句だったというんだ。そして菖蒲とヨモギの間さ、チョロンと野郎コが入ったというんだ。そして野郎コの匂いしなくて、菖蒲とヨモギの匂いだけだから、五月節句には菖蒲とヨモギさすんだど。とーびんさいすけ、さいざぶろう、さいざの尻さ火がはねた。おいまな屁でぷつと消した。

（砂子関・工藤かなえ）

15 法印と狐

湯殿山、月山詣りの法印さまが、途中に来るべきときに、狐が昼眠したつかけ。
ところが法印さま、むかしはホラの貝もつて歩つて、

「ああ、畜生、こりや、昼眠してやった」

て、ホラの貝、狐の耳さあてて、ボオーと鳴らしたところ、おどろいて飛び上がつて、ほうして逃げて行つて、ふり返つて見つだつけな、狐あ。

「畜生、魂消えて行つたはあ」

て見つた。ほうしてものの二、三町も行つたと思つたら、まだそんなに暗くもなんねと思つたのが、空、一寸先も見えねように暗くなつてきたんだもの。

「何だてした。こんな早く日暮れるわけない」

んだげんど、ちつとも歩かんね、暗くて。

「こりや困つた」

ほうして山道、手さぐりで行つたところが、はるか向こうに小さな光あ見える。

「はて、あそこに光あ見える。あそこまで何とかして、這っても行かんね」

ほうして、ほれ、手さぐり足さぐりではあ、行ったところが、ばあさんが一人
ばりいた。

「こんばんは」

て行つた。

「何とも、かんとも暗くなつて、右も左もわからね。どうか今晚一晩泊めて下さ
れ」

「泊めてもええが、おらえの家はこの通りのあばら屋で、何にもないげんども、
ほんでもええごんだら泊らっしゃい」

て、ばあさんが言う。そうしていたところが、何だか菰かぶりみたいな、脇さ
寝つたのがある。ところがそのばあさんが言うには、

「おらえのじいさんが今逝^けくなった。隣の村まで知らせして来^くらんねなだがら、
お前、留守居して待つてで呉^けねが」

て言うた。いや困つた。

「いや、ほだごと分んねっだな」

ていうたげんども、「頼みます」て、ばさま出はって行ってしまったて。ほうし
ていたところが、約一刻ばりたったところが、その菰が動き出した。ずうーと
動き出した。何ともものすごい。じいさんが顔振って起き上ったって。

「うー、うらめしや」

て、起き上がってきた。

「おっ、おっかない」

ものすごい顔して来るから、だんだん、だんだん、尻こぎして、こりやまぐつ
で行ったと思って目覚ましてみたれば、お日さま真中で明るくて、見たれば狐来
て、狐ばたぶらかしたんで、われは狐からたぶらかさったんだって。

(砂子関・工藤 馨)

16 蛇 舁 入

大きな百姓してで、前田千刈り、裏田千刈り、水が来なくなつて困つていだど。
ひどい日でありな。

「この田んぼに水掛け手伝つた人あつたらば、おれ、三人の娘いるうち、どれでもええな呉^けでやつてもええ」

そしたら、蛇がきて、

「おれが水掛けて呉^けつから、おれさ娘呉るが」

「どれでもええな呉る」

ていうたところが、ほれ、この通り、水掛けてもらつて大豊作結んだべ。んだからは非とも、どれか呉てやらんなね。こりや大変なこと出たと思つたのつだね。

「お前だ三人のうち、誰か嫁^{むか}く人、いねか」

「べらぼうな、誰あ蛇さ嫁^{むか}さつて行く人あるごんだ」

て、一番上の姉から言わった。二番目の姉もそういうたど。

ところがほれ、一番ちっちゃいな、

「ほういうわけだら、おれは行く、何も心配すつことない。御飯たべたらええが
んべ、寝ていねで」

て、親ば安心させだど。

「お前は親孝行だ、よしよし、お前のええやつ何でも買つてやるから、嫁いつてく
れな。買つてやるやつ何あええ」

ところが、娘が賢くて、

「針千本とフクベンチ、買つてくれ」

て、ほしてほの針千本とフクベンチもらって、高い下駄なんかさままなもの
買つてもらつて、嫁いぐことになったど。その晩、蛇がええ男になって、娘もらい
に来るわけだ。

「娘もらいに来た」

見たところが、えらい立派な紳士だど。

「ほだなええ男だったら、おらも行くがった」

というげんども、三番目の末の娘が、山越え野越え行っただんど。

ところが大きな沼あつたど。ほうしてその沼さ行つたれば、

「おれ、ここの沼の主だ」

「ほんだら、このフクベンチを沈めたごんだら、お前の嫁になるから」

て、ほのフクベンを沼さ浮かしたていうんだ。ところが、蛇体になってフクベン沈められるもんでない。ほうしてフクベン、一生けんめい沈めんべと思つてかかったな、そいつさ、針千本まいたなだど。そしたら針がささつて、針のために蛇体が弱つて死んでしまつたど。どーびん。

(砂子関・工藤 馨)

17 猿

聲

むかしあつたけずもなあ。

おどつつあ、三人の娘もて、ほして山さ田持つてだんだど。ほして、田んぼ作つていただけんど、日でりだけか何だけか、田さ水かかんねくて困つて、毎日行んけんども、田さ水かけらんねくて、かまわずそち掛けつど、こち掛かんね、こちさ掛けつどそちさ掛んねではあ、困つていで、んでも次の日行つてみて、そこの石さ腰かけて休んで、煙草喫みしたれば、猿あ出はつてきたてだな。ガサガサ、ガサガサ。ほして猿あ、

「なえだて、何心配なことあんのだ」

て、山のおんつあだど。

「水あ来なくて、今年は田はわかんねべなはあやあ」

「なして」

「んだて、水かけらんねどれあ、なぜかして水掛けらんねが、おんつあ」

ていうたれば、

「何でも、おんなえつあ、ええやつ呉なえつさげはあ、言うこと何でも聞ぐはげ」

「んだがや、んだら、おれ言うこと何でも聞つこんだら、おれ、一生懸命して水かけて呉るっだな」

て、行つたていうなだな。ほして、猿は水かけて呉だなどど。ほうしたらば、水はかかつて、きれいな田になつて、ほれ、米穫れるようになったつて。

ほしたら、田んぼさ行つたら、またおんつあと行き会つたつて。

「おれちや、何でも呉るなて言うたな。ほんじゃ、おれちや、三人娘いた、その娘一人呉ろ」

てだど。約束したはげ、そのおどつつあ、仕方なくて、「ええ」て言うたていうなだな。こんどは猿ちや、娘呉るなて言うてしまつた。誰、猿のおかたになんな居ねべかて寝ていんなだどはあ。

娘だ心配して、

「なして、おどつつあ、起きて御飯食おまつたらええべなやあ。なして食べね」

「なんでもないげんど、んだらお前だ、おれの言うこと聞いて呉つかやあ」

「んだら、起きて御飯食うがやあ」

「猿のおかたになつて呉つかやあ」

「猿のおかたになの、なんねべやあ」

「困った」

なていたら、二番目、こんど来たんだど。

「猿のおかたになど、誰なつどこだ」

て言うたていうなだ。ほうすつど困つてなあ。一番ち小つちやい娘来たけはげ、

「お前、猿のおかたに行つて呉らんねが」

「んだら、行くさえすつどええのが、おどつつあ」

「んだ、行つてな、行つてさえ呉つどええなだ」

「んだか、おれ行く」

ほして、猿のおかたに呉けつだていうなだな。

ほしたれば、猿も喜んで一生懸命稼いだげんども、春さなつたれば、桃の節句

の頃になったんだとはあ。んだはげ、節句礼行かなねわけだ。嫁の家さ。そして餅搗きたんだど。ほしたれば、

「餅搗いだげんど、何が入って行かねど……」

「おらえのおどつつあ、ほだな、重箱さ入つたら、重箱くさいて嫌んだなあて、いう」

てだど。

「んだら何さ入つてやあ、丸べてか」

「ほだごとすつど、丸べたなの、固くて嫌^やんだくなつさげ、ほだな餅食^くだくないもなあ、好^すかねていうもなあ」

「ほんだら、なぜしたら」

「おらえのおどつつあ、臼で搗いたんださげて、臼から一つずつ切った餅ばっかり好きだよ」

て、娘いうなだど。

「んだか、んでは、臼がらみ背負って行くべ」

て、猿は臼ば背負ったていうなだな。

「おどつつあ、ほんでは喜ぶべな」

て。猿あ、臼がらみ背負つて、節句札に來たていうなだな。ほうしたらば、途中さ來たらば、桃の花咲いっだんだど。

「桃の花咲いっだがやあ。あの花持つて行つたれば、なんぼかおどつつあ喜ぶべちや」

ていうたんだって、娘が。

「んだか、んだら、おれ取つてくつか。臼ちよつと降ろしてが」

「ほだなどこさ置くと、土くさくて、匂いして食だなくなるで、おどつつあんいう」

「んだら、背負つてが」

て、背負つて登つたど。

「この枝か」

「いま少し、ほりや上んなよ」

「こいつか」

「んね。はいつ、もう少し上んな」

「ほだら、こいつか」

「ほんねの、ほりやほりや、ちえつと上んなよ」

「こいつか」

ていうど、

「いま少し、こっちの手のどこんなよ」

「こいつ、こいつ」

「んだ、んだ。ほいつよ」

ほして、手伸ばして取んべと思ったら、バリバリと折^おだつではあ、臼^ちがらみダ
ボンと川さ入って、猿あ流つで行ったんだど。んださげて、一番小^ちつちやな娘、
親孝行して、田ば耕したんだけど。

(砂子関・悪七)

18 猿

聾

畠の草とり大変だから、

「畠の草取りしてけつど、三人いた娘、どれかええな、やつてもええ」

て、もらしたけど。ほしてまた三人娘の末っ子が猿の嫁になることになったど。

その娘がなかなか利巧な娘で、猿どこなて、人間だらば行かれるわけない。それを、「おれ、行く」て、嫁^いつて、山さ行った。

こんど、

「里歸りに、何もって行ったらええべ」

て、猿が言うわけだ。

「何も、ほれ、土産なていうものないげんど、餅でも持つて行けばええつだな」
て、ほのかがいうた。

「何さつめて行ったらええべ。お鉢さでもか」

「お鉢なのさつめつど、おらえのおどつつあんだ、食ねもね」

「んだら、何や、鍋さでも入っでがぁ」

「鍋も鍋くさいて食ねもの」

「何、んだら、臼がらみか」

「んだな、臼がらみだらええでねえべか」

そういうて臼がらみ背負せた。途中に大きな桜の木、春先だから、桜満開に咲いっただんど。ところあ、

「ああ、桜咲いっだな、この桜一枝折って行ったらば、なんぼか喜ぶべちや」
ていうたて。

「んだら折って行んか」

「んだなあ、折ってけろちや」

猿なもんだから、木登りなど何でもない。ところが、臼がらみ背負ってだ。

「臼、こさ降ろしてが」

「こさ降ろすど、土くさいて食ねぐなるも」

「んでは背負ってが」

「ん」

て、ほうして、その桜の木がガケの高いところの下のえらいガンガンしたところの桜の木であつたど。それからその桜の木さ臼背負つたまんま登つたど。

「この辺か」

「いや、ほだどこでなく、もつと上よ」

「この辺か」

「いや、ほだどこでなく、もつと上よ」

「この辺か」

「まだ上よ、ありや、あそこにええのある。ちよつと上の方」

「この辺か」

「いや、もつとだ」

て、登つて臼背負つて登つたもんだから、「この辺か」ていううち、桜の木折れだつてよ、重たくてはあ、ほうして臼と共に真逆さまに落つてしまった。猿が水におぼれて死んでしまったという話だ。

19 猿

聲

おじいさん、三人の娘持ったけど。ほして、前田千刈り、裏田千刈りと二千刈り持っているうちに、前田千刈りの方はいつでも水あかがついていっけんども、裏田千刈りていうどこには、水はいつでもかかんねくて、干^ひつてるていうのだど。

ほして、おじいさんが、こんど石の上さ腰かけて、

「この田に水だっぷりかけて呉る人あつたらよ、娘三人持ったな、どれでも一人ええな呉つけんども」

て言うたれば、猿あ聞きつけてよ、

「おれ、水かけて呉る」

て、かけて呉だどこだど。

ほして次の朝、田の水見に行つたればよ、水だつぷりかがつていだっけど。ほしておじいさんが困つて、困つてはあ、家さきて、寝つたどこだど。して一番大きい娘、ほれ、

「おじいさん、おじいさん、御飯あがつしやい」

て、起こし行つたれば、

「んだら、猿さ嫁に行んか」

て言うたれば、

「嫁なて、猿の嫁なて、誰行んか」

て、戸閉めてきたど。ほしてまた、おじいさん困つて、困つてよはあ、寝つたれば今度、真中の娘よ、また、

「おじいさん、おじいさん、御飯だ」

て起こしたど。またおじいさん、

「んでは、猿さ嫁に行つてけるが」

て言うたれば、

「なんだて、猿の嫁など行かね」

て、また戸閉めて帰つてきて、こんど一番ちっちゃい娘行つたんだど。ほしたれば小^ちっちゃい娘、

「おじいさんが呉でやつどきなど、どきでも行く」

なて、いうど。ほしたら喜んで、おじいさん起きて御飯食^くべて、猿来^くんな待じつだど。ほしたれば約束どおり、

「おじいさん、おじいさん、娘をもらいにきた」

て、猿あきたど。

ほして、仕度して、千なりフクベンと針千本と、

「お土産はこいつだはげな」

て、娘さあずけてやった。ほして、

「行く途中に、こいつば、こぼして行げよ」

て、ゴマを持たせてやつたど。ほして娘、猿と一緒に行きながら、ゴマ、ぼろりぼろりと、ところどころさ落としてきたど。

ほしてゐるうちにこんどは、桜の花咲いだど。んだはげて始めて、一ぺんも行ったことない、桜の花、お土産持^たつてよ、泊まりに来るなだけど。

餅搗いて背負つてくることにしたど。猿あ、

「おじいさん、アンコ餅か」

ていうたれば、

「アンコ餅なて鍋さ取つど、鍋くさいて好かねかも」

ていうたど。

「んだら、納豆餅か」

ていうたれば、

「納豆餅などすつど、木鉢の匂いするて、好かねも」

て、娘言うどこだ。「ほんでは臼ままか」ていうたれば、うんと喜んだど。「食う」て、娘言うどこだど。ほして、ほりや、臼のまま背負つて来たらばよ、川ぶちさええ桜咲いっただけど、ほして、

「あの花だら、一枝欲しいちゃ」

て言うたらば、猿は、

「ほんじゃ、白おろして取って呉る」

「いやいや、白、土さおろすど、土くさくなるから、好かねていうから」

「ほんじゃ、背負ったままか」

て、登ったど。ほして、「この枝か」て言うたれば、

「いま少し上んなええ」

て、どこまでも登せて、「この枝か」ていうたれば、白背負っていたから、枝折れて、猿は川さ落ちたど。ほしたれば針とフクベンよ、猿は助けて呉るて言うたら、

「このフクベン沈めて呉^けつこんだら、助けっす、んねこんだら助けね」

て、娘いうてよ、猿は一生けんめいになってだら、弱ってきたてよ。ほこさ針ぶつつけてやって殺したなてよ。ほして娘ばり帰つてきてよ、親孝行したど。どーびん。

(月山沢・遠藤あさえ)

20 猿

聲

水かかんね田さ、猿から水かけてもらったど。ほんで娘を猿に呉つことにした。
親孝行な娘、三番目んなだかの娘が嫁に行くどこだどな。相手は猿だ。

嫁に行つて、こっちの実家さ泊りに行くに、何もつてつたらええがんべというたらば、

「餅好きだはげ、餅ええ」

て言うて、娘が餅搗かせて臼がらみ猿ちや背負わせたのよ。

「重箱さ入れつど重箱くさい、土さ置くど土くさくて食んねはげて、そのまま降ろさねで」

て、ほのまま背負わせだのつだな。

桶かかったどこさ来たれば、きれいに桜花咲いっだどころさ来たはげで、

「この花一枝持つて行つたら、うんと喜ぶべ」

て、ほの娘いうたれば、猿が、

「ほんだら持つて行く」

て言うなで、臼がらみ背負つて木さ登つて花とつどこだ。

「この花か」ていうど、「ここんね、もう少し上」「いま少し上」て、だんだん上の方さ登つたんだな。細いどこ行つたはげ、木あ折だつて、川さジャボンと入つたんだど。ほして、川に流れつどき、

猿沢に流るるいのちはおしくなければども

あとに残る お姫 かわいや

て、歌つたんだけど。ほんで娘は家さ戻つてきたんだど。

(砂子関・工藤あきえ)

21 桃 太 郎

むかしあつたけずまなあ。

ばんちゃ、洗濯に行つたれば、赤い桃と白い桃流つてきた。

白い桃 ほっちゃ行け

赤い桃 こっちゃ来い

て、ばんちゃいうたれば赤い桃だけこっちゃ、ツブツブ、ツブツブ流つてきた。ばんちゃが拾い上げてきて、戸棚さしまつておいだ。じんつあが山さ柴伐りに行つてきて、町に売らんかねだから、帰つてきて、二人で割つて食うべと思つて、ここさ持つてきて、庖丁とマナイタの上で開けんべと思つたら、子どもが生まつだど。ほんで桃太郎という名前つけだど。

その桃太郎さんが、だんだんとうまいもの食せだり、まつたりしたら、大きくなつて、じんつあとばんちゃ、いつまでも若くなるように、鬼が島さ鬼退治に行くことにしたけど。退治に行つて桃太郎が途中で腹減つど悪れから、キビ団子搗いてやるつて、ばんちゃ言うて、ほしてキビ団子をたくさん腰さつてで行つたら犬が山からトントンとやつてきた。この犬さんは、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこにござんなだ」

「おれは鬼が島さ鬼退治に行くんだ」

「んでは、わたしさもお伴させて呉^けらっしゃい」

ほうしているうちに、

「んだれば、お前ちやもキビ団子一つ上げましょう」

というわけで、キビ団子一つ上げだ。ほしてまた行つてゐるうちに、お猿さん来た。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこへ行く」

「鬼が島さ、鬼退治に行く」

「んでは、わたしばも連れて行つてけらっしゃい」

「んだれば、お前ちやもキビ団子上げましょう」

一粒食せだど。ほしてまた行つてゐるうちにキジさんがきた。ほして、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさ行く」

「鬼が島さ、鬼退治に行く」

ほして、キジさも、

「お前ちやも団子上げましょう」

て、一粒上げて、後はしまったけど。ほして山に登ったところが、高いところに門番がいんだだ。赤鬼、青鬼もいんだけど。これをどうしたらこの門を破れるかて考えた。表の門は犬さん、裏門は猿さん、ほしてこの門をあけることできなかつた。堅い門だから。

ところが、キジには羽根がついてるわけだべ。ほして、飛びこえて、ほの錠をはずした。ほして鬼を退治した。喰ってかかって、ワンワン犬にはかかられる。猿にはかかられるで、とうとうみな子分だ殺さつた。ほして殺さつてみれば、一番の大將鬼がいた。そして降参したんだ。

「人をさらって、食ったり、まったりすつこんだら…」
ていうたら、

「全部、宝もの、お上げすつさげ、どうかおれば殺さねで、勘弁して呉らっしゃい」
こういうわけだ。ほして宝物をつんで、大きい鬼だけ助けてきたんだ。ほして来つどき、ほれ、猿さんが後押しで、犬さんが車ひき、キジさんが綱引きだつた。

「犬は引き出す、エンヤラヤ。猿は後押し、エンヤラヤ。キジが綱引く、エンヤラヤ」

て、帰ってきたど。

（砂子関・工藤かなえ）

22 桃 太 郎

とんとむかしあつたけずまなあ。

じんつあとばんちやいだっけど。ほして、ばんちや、川さ洗濯さしに行つたれば、大きな桃流つて来^くっけど。大きな白い桃と青い桃流つてくっけど。

大きな桃 こつちやこい こつちやこい

ていうたけど。ほして、ばんちや、ひょいっと拾つて来たなだ。ほうして、ばんちや持^たつて、やつと家^が来たど。

「なえだて、じんつあ、こだえ大きい桃拾ってきた。割って食ったらええなあ」
て、大きな桃。じんつあ、

「ほだなあ」

て、割って食うべと思ったれば、おぼこ生まつだていうなだ、ほれ。

そのおぼこ、めんごくで桃太郎て名つけたなだはあ。

大きくなったら、その桃太郎、鬼が島さ行くととき、キミ団子、ばんちや、こしや
えで呉だんだど。

一番先に犬あ来て、

「桃太郎さん、桃太郎さん、キミ団子一つ呉^けでけらっしゃい」

「おれは鬼が島さ鬼退治に行くから、お伴するごんだら呉る」

て、呉だんだど。それから猿あ来て、キジも来たど。ほして車ひっぱって行っ
たれば、今度、鬼が島さ行ったられば門が閉だつてだ。ドンドン叩いたげんど、開
けらんねほでに、キジがとんで行って開けたんだど。ほして入って行ったんだど。
ほしたれば赤鬼なんだか青鬼なんだか、いっぱい居て、犬はワンワンとかかつて、

猿はガチャガチャとして、降参させて、宝ものとして車さのせて、エンヤラヤ、エンヤラヤで引つ張つてきたんだど。

(砂子関・悪七)

23 桃 太 郎

おばあさんが川にお洗濯に行つて、桃流れてきたな、拾つて、ほして家さ歸つてきて、おじいさんと分けて食うべと思つたれば、中から種子でなく、桃太郎さんが生れてきたど。ほして桃太郎さんをおじいさんとおばあさん二人で、育ててな、そして大きくなつてから、鬼退治によ、出かけて行つたなて。

ほんどき、キミ団子たくさん、おばあさんが作つて持たせでやつたつてな。ほしたれば途中で犬と会つたつてよ。ほして犬が、

「キミ団子、一つくれつど、ついで行くから、一つ呉^けでけろ」

なて。ほしてまた犬と二人で行ったらば、キジ出はったなてな。ほしたればほのキジさんも、

「お団子一つ呉れっど、応援に手伝いに行く」

なてよ。ほれからまた猿も出てきて、同じこというて、キミ団子もらった。四人になつて、行ったどこだけな。ほしてほれ、お姫さま洗濯しただけな。

「どうしてこんなどこに來た」

て、桃太郎さん見たれば、

「鬼にさらわってきたんだ」

て、桃太郎さんに話すどこだけな。ほしてほのお姫さまから話を聞いて、かくれ場のあつどき、てんでに隠つて、鬼が出て行つたの、帰ってくるのを待ちつたけど。鬼が帰つてきてからよ、桃太郎だちみんな出て行つて、鬼にはお酒、選よつて、切なくなるお酒出したし、退治に行つた人だは強くなるお酒のんで、仇討ちしてきたけど。ほして、鬼の宝みなとつて、喜んで帰ってきたところだけだ。どーびん。

24 桃 太 郎

じんつあは山さ柴刈りに、ばんちゃんが川さ洗濯に行つたど。ほしたれば上の方から桃流つてきたど。白い桃と赤い桃とな。ばんちや、赤い桃ええくて、

「白桃、んなくて、赤い桃こつちやこい」

ていうたわけだ。ほして、赤い桃がこつちや来たなを自分が拾つて家さ歸つてきたわけだ。

「じいちゃん来てから、二人で、ほの桃割つて食^{たべ}んべ」

て、神棚さ上げておいたど。ほしてばんちゃんが待つてだのよ。ほしてじいちゃんが来たとき、二人で包丁を入つて食うべと思つて割つど思つたら、

「そつと割れ、そつと割れ」

て、桃の中から言うなだど。ほして桃の中から生まっだから、桃太郎て名付けたなよ。

ほして大きくなって、大事におがしたど。

こんど鬼が島さ鬼退治に行ぐて、キミ団子ついて、腰ささげて行くと、途中でキジに、犬に猿に行き会ったど。

「おらも行ぐはげ、キミ団子一つ呉でけろ」

て言わっで、キミ団子一つずつ呉だんだ。ほして行ったなだな。一番最初飛んで行ったの、キジだな。何じよなもんだか見に行つて、それから桃太郎に犬に猿に行つたつたな。青鬼、赤鬼、みな鬼ば降参させたら、奥から年寄りのばさま出てきて、宝もののあつどこ教えてもらつて、宝ものもらつて帰つてきたど。

犬と猿とキジというのは仲わるい奴で、そいつを桃太郎が手につけた話だど。

(砂子関・工藤あきえ)

25 地蔵浄土

ええじんつあとばばさいだど。

「じんつあ、じんつあ、団子上げて食うべなあ」

ていだれば、団子がひょいとねずみ孔さ入って行つたんだど。ほしたれば、ほこさ行つて、ほの穴ぼこさ入って行つたればよ、ずうつと入って行つたれば、中広くて、ええどこだど。ほうしていたれば、赤い鬼だか青い鬼だか、なえだか、「はあ、じんつあ、あの団子搗いて呉^けだ、じんつあ、お土産もつてきたんだ。ほんじゃ」

ていうたど。ほうして御馳走食せて呉^けで、ほして踊りおどつて見せて呉^けだど。じんつあ御馳走なつて喜んでいたらば、鶏は鳴いだんだど、一番鶏が。

「一番鶏ないたぞお」

「まだ、ほんでは差し支えない」

また一生けんめい踊つて見せて、歌つて聞かせるほど、

「ほれ、二番鶏ないたぞお」

「さあ」

なて、じんつあ、ほだえしていたうち、

「三番鶏ないたぞお」

なて言うたれば、こんどは明るくなつてはあ、鬼だ、どんどん逃げて行つたんだど。ほうしたればじんつあ、宝物いっぱいもらつて来たんだど。ほしてじんつあ喜んで、ええじんつあだはげ、お土産いっぱいもらつて来て、ばんちやさお土産もらつてきて呉^けんだんだど。

ほうしたれば、隣のじんつあとばんちや、いつも根性悪^{わる}れじんつあとばんちや、ひこばんばなあ、ほれ、真似かすして（まねごととして）行つたていうなだ。ほしたら、

「また、じんつあとばんちやきた」

ほしてこんど、鶏のまねして早く帰つど思つて、鶏の真似したんだどはあ。じんつあ、ほだえいつまでも食つていっど無くなつど思つて、

「さあ、一番鶏ないてきた」

ほして二番鶏ないだど。

「なえだて、二番鶏、こだえ早く鳴く」

こんどは三番鶏ないだば…。

「こだえ暗いうち鳴くなて…」

ほして、じんつあいじめらつで、利息たがりじんつあだて、いじめらつでいじめらつで、ほうしてお土産どころか、血だらけになって来たけどはあ。んだはげ嘘まかしたり、欲たけだり、さんねずなあ、お前だ。どーびんさんすけ。

(砂子関・悪七)

26 地蔵浄土

団子まるめつたら、団子一つネズミ穴さころげて行つたど。ほいつ追っかけて

行ったらば、ほの中に地藏さまいで、そこき団子、土ついたどこ取って、ええどこぼり上げだど。ほれから、地藏さまが、

「天井さ上がっている」

というから、上がっていたら、鬼きたど。その鬼がバクチ打ちして、ほうして
いるうちに夜明ける頃、鶏の鳴き声したど。

一番鶏なつた。二番鶏なつた。三番鶏なつて夜明けるいうもんで、バクチ打ちだ、みな置いてなあ、はいつ、みな、じんつあもらつて帰ってきたど。

ほしたら、

「なえだて、こっちの家は福しくなつた。なぜしてだ」

て、隣のばんちや聞いて、まねして隣のじんつあも行つたど。ほしてまたほこ
さ行ったら、天井さ隠つていたら、見つけらつて、

「人くさい、人くさい」

て言わつて、銭とつてくるどころか、ひどい目に合つたど。

(砂子関・工藤あきえ)

27 食わず女房

その男は、毎日ひにち、

「飯食ねおかた欲しい、飯食ねおかた欲しい」
まま

て、町中にお触れ出したんだ。ほしてなかなかいねがったべ、ほれ。

何日いつかも経って、やっと見つかったんだ。

「わたし、飯食べません。んだからおかたにして呉らっしゃい」

こういうわけだ。ほうしているうちに、嫁さんは、いつ来て見ても、飯、朝炊いで亭主を送り出す。食った跡がない。おやじは、

「何だて、いっかも飯食ねで、なになもんだべ」

て、二階さ上がって隠って見つけた。ほしたら大きな鍋さ飯いっぱい炊いで、ヤキミシ握って、頭の中じりさ、ストンストンと入ってやるんだ。そいつが山姥だったべか、山さ逃げて行ったど。

(砂子関・工藤かなえ)

28 食わず女房

むかしから、ヨモギと菖蒲、五月節句に家の軒にさすのはどうしてか。
鬼が入りこんで、

「おれは、とても歩けねえから、あそこまで背負って連れで行げ」
ていうたど。

「何でもええ、何でもええから、入れもの、唐戸さ入って背負って行げ」
て。ほして、男は背負って道を運んで行つたど。ほして音しなくなったほでに、
そつと降ろしたど。中で鬼は眠でだんだど。「今だ」ていうもんで、逃げて行つた
ところが、ヨモギと菖蒲の藪あつたから、そこに隠つでいた。隠つでいるうちに、
目が覚めたがして、唐戸から出はって、菖蒲とヨモギ原越して行つて、男は命と
りとめた。そのために五月節句に菖蒲さすんだど。

(砂子関・工藤盛雄)

29 笠 地 蔵

あるところに貧乏なおじいさんとおばあさんあったけど。

お正月が来るのに、餅も搗けない。

「何か売るものがないがなあ」

て、おじいさんが言うたど。おばあさんは、

「売るものなら、柴ぐらいなものだが」

ていうたら、おじいさんは、

「柴でも町に行つて走つて来つかなあ」

ていうたど。町さ行つてみつど、買物する人ばかりだげんど、柴買つてくれ

る人あいながつたど。おじいさんは売れね柴をかついで雪降りの道を帰つたど。

そしたら木の下に笠売りがしょんぼり腰かけていたど。近寄つてみたら、

「笠一つも売んねなでなあ」

て、笠売りは言うたど。

「持ってきた筥、このまんま持つて帰らんねはあ、そいつもつらいしなあ、お前の柴と取換ねえかなあ」

と言うたど。おじいさんは、「ほんじゃええ」て、柴と筥をとりかえて、手拭でほほかぶりして、五つの筥かついで、とぼとぼと野原まで帰ったど。すつど六地藏さんが雪にぬれていだっけど。おじいさんは、

「そうだ、筥と取換えてきて、ええがった。この筥かぶせてくれんべなあ」

て思つてかぶせてみたら一つのお地藏さまに筥が足んねがつたど。自分のかぶつてた手拭かぶせて、「勘弁な」て言うて帰つてきたど。日が暮れるころ、おじいさんは家に帰つたんだど。おばあさんは、

「ああ、ごくろうさま、柴売れてええがつたなあ」
ていうど、おじいさんは、

「柴と筥を取りかえて、地藏さまにかぶせてきた」
て話したど。

「そいつあ、ええことしてくれたなあ、おじいさん」

て、喜んでいだんだど。二人は囲炉裏で温まって寝たんだど。ほしたら夜中に目がさめたど。ほしたら外をヤンサヤンサという音がするんだど。家の前まで来つど、

「昨日のお礼だ」
きんな

ドサーツという音がするんだど。二人が戸開けてみたら、餅や金などいっぱいつまってる俵が六つおいてあったけど。二人は「これは、これは」ておどろいて表の方見たら、手拭と笠かぶったお地藏さまがノコノコと帰るうしろ姿が見えだっけど。

（月山沢・遠藤つるよ）

30 笠 地 蔵

むかしとんとあつたけどやろー。

むかしなあ、じんつあとばんちや、貧乏暮しな人で、貧乏で子どものいねえ人だったど、ほれ。ほうして山さ行つて柴を伐り、ばんちやは麻だの何だて、草をとつてきて、股引織つたんだど。ほして町さ行つて売つて暮しつたんだど。

そのうち、雨傘ていうの作つたんだど。ほのじんつあ。ほしてほの雨傘を町さ行つて、なんぼおふれ廻したて、ほの雨傘買う人いながつたていうんだな。んだから、お正月の餅の買いようながつたど。

ほして、仕方なしに傘背負つて戻つてきたら、六地藏さま立つていだんだど。ほして雨に叩かれ濡れつづれ濡れていたど。ほんで可哀そうだて、六楷しかもつてね傘だつたから、六地藏さまさかぶせて来たど。したらば夜の夜中、

「伝三郎、戸開けろ、開けねえごんだら、ふんぶかすぞ。伝三郎、戸開けろ、開けねえごんだら、ふんぶかすぞ」

いや、こんどは夜の夜中に戸開けろ、戸開けろ、戸開けねえど、ふんぶかすぞていうので、んだはげ恐つかなくて、突つ張り棒かつたの、はずして戸開けんだど。ほして逃げてきたど。ドシン、ドシンという音したんだど。じんつあと

ばんちや恐つかなくてはあ、隅こさひつついて寝っだんだていうなだ。

ほうして、次の朝起きてみたら、米だの餅だの、何だつて、酒だていうやつ、すっかり置いてあつたんだど。ほしたれば、ほいつあ、何までもない、地蔵さまさ笠かぶせたお礼として呉だもんだど。

(砂子関・工藤かなえ)

31 笠 地 蔵

じんつあとばんちやいて、じんつあが正月の町買い行つたげんども、途中、地藏さま、笠かぶつていねどこ通つて行つたんだべちや。ほんでわかんねと思つてじいさんが、こんど食うやつ買うより、地藏さまさ笠かぶせた方ええどて、笠買つて地藏さまさかぶせてきたんだど。

ほしたれば、その夜来たのつだな。地藏さまだ、何かいっぱい持ってきたんだ

ど。ほして、何か音すっど思つて出はつてみたら、すばらしい音立で、われ食ねで、地蔵さまさかぶせて呉^けだお札に、戸の口さどっしり置いて行つたどこよ。どーびん。

(砂子関・工藤あきえ)

32 鶴 女 房

若い男が働きに行くとき、かたわになつた鶴助けだど。

鶴が女になつて、しばらくして尋ねてきて、棧織りしたど。

「おれ、棧織りしてるどこ、決して見ないで呉ろ、決して見ないで呉ろ」

て、毎日棧織りしていたげんども、男は見つだくて見つだくて、見たんだど。

ほしたれば鶴はいなくなつて、

「助けらつた恩返しに來たんだっけ」

て、語って出て行つたんだど。糸も何もないのに、棧織りしてさっげ、男だで見んなて言^やつだて、見っだいがんべや。

（月山沢・遠藤あさえ）

33 雪 女 房

雪女は吹雪と一緒に来るんだど。そいつ見つけど、その人あ死ぬんだど。そいつが、かか居ね男どさ来たど。その男は、ええ女だったから、嫁にもらつたんだど。それが雪女だと知らつて、男は殺さつてしまつたんだど。

（砂子関・工藤かなえ）

34 栗福と米福

栗福は先妻の子どもで、米福は後妻の子どもだった。栗拾いに行った。ほしたれば、自分の子どもさ、きれいなええハケゴあずけて、先腹せんばらの栗福さは穴コあいだハケゴあずけて、拾っても拾ってもたまらね。家さ帰ってきてごしやがれだど。ほしてまた、ほれから栗拾いに行ったときも、先の通りハケゴ、ほうしたんだど。ほしたら小さい方が、

「姉さん、どうして姉さんの栗、たまらねべ」

て、妹の方が見て呉だらば、穴コあいつだてよ。

「ほんでは溜まらねなだ」

て、木の葉っぱでくけて、妹の方で拾った栗分けて、「同じに拾ってきた」てい
うどこけな。

「なして、こだえ同じに拾った」

て、自分の子の方さ言ったら、

「姉さんのハケゴ見て呉だれば、こういう風だはげ、穴コふたいで呉^けで、拾ってきたんだ」

て、妹の方が語ったど。「なしてほだごどした」て、ごしやがつだど。

はれから、芝居きたから、芝居見に行くことになって、先腹の子は、

「洗濯して、留守番してろ」

て言^やつで、自分の子と二人ばり行ぐんだけど。そして見て帰ってきたんだけど。

ほしてこんどまた芝居かかって、二回目に行ぐどきも、また留守番させて行つただけど。ほしたれば友だちだ迎えに来てな、お洗濯でもお掃除でも、みな手伝いして、出かして、友だちだ持ったやつ、みな貸して行つてみだど。友だちはうまいものみな分けて、食べっだどこ、おかあさんが見^めけで、家さきてから、

「お金どっから持って行つた」

「着物、どっから着て行つた」

どっから入って行つたので、ごしやえでいじめだど。

最後にはおっかさんが目見えなくなつて、自分の子ば尋ねて行つたどごだけど。

どーびん。

(月山沢・遠藤あさえ)

35 まま子いじめ

先妻の子どもが糠福、後妻の子どもが米福で、栗拾いに行つて、まかま母の子には孔ぼあいだな、あずけて、われの子さは孔ぼあいでねなあずけて、糠福はなんぼ拾つてもたまんね。んだずど、家さ来てごしやがつで、まかま母の子どもばりごしやがつでいんのだど。

お釜鍋さ火焚いて、萩の橋渡らせらつで、死んだんだど。ほして埋めらつで、後で幽霊になつて出はつたど。

「まかまか、にくいちゃ」

なて語つて出るんだけど。

36 甘 酒

むかし、甘酒作って子どもが、

「番してろ、にき（お前）」

その子ども、〈プツ〉と名付ிட்டど。ほして、

「甘酒かましてろよ、プツ」

て。ほして甘酒一生けんめいにかましていたら、プツプツとわいできたはげ、

「何だ」

〈プツプツ〉「何だず」

〈プツプツ〉「何だず」

て言うたけあ、返事すねわけだ。甘酒だからな。めんどろくさいはげ、火箸で

はあ、ジュグリと刺したんだど。

ところが、甘酒がざあーっともつてしまった。そしておつか帰ってきた。

「甘酒、ええあんばいだが、プツ」

「プツプツていうから、〈何だ、何だ〉て言うても、何ても言ね^やはげはあ、ごしやえではあ、火箸でさして、みな割ったはあ」

「馬鹿、ほに。勘定のない、プツざあ、煮立つはげ、プツプツていうたんだ」

「なして、おればプツて名付けだんだ」
て言うたど。

(砂子関・工藤かなえ)

37 和尚と小僧

和尚さんと小僧いだっけど。

筋子買って瓶さ入っでで、

「ほれ、小僧、お前だ、この瓶あけでなんねえぞ。毒入ったんだはげ」
て行ったなて。

ほして、小僧、和尚さまの大事なものぶつくして（こわして）、こいつ食うど毒
だはげ、死ぬはげて、ぶつくしたの申訳ないて、開けてなんねて言っやじや瓶あけ
て、和尚さま出はって行った後に、はいつ、食ったべちやね。死ぬべと思つて、
はいつ常に筋子買って、わればり食つて、こいづグビ漬けたとかけて、小僧さ食
せねがったのだど、んだはげて食だくて食だくて、食ったんだべちやね。

ほして和尚帰って来たれば、

「和尚さま、大切な奴、ぶつくしたはげて、こいつ毒だて、こいつ食うど死ぬと
いうはげ、死ぬべと思つて食ったげんど、死なね」
というたど。小僧賢こがったんだべ。

（砂子関・工藤かなえ）

38 フウフウとドイドイ

お寺さ、フウフウて名付いたのと、ドイドイと名付いたのといだけど。ほしてその小僧ば寝せで、眠てからばかり、お寺さま、われぱり正月餅あぶつて食つた話だっけな。

ほしたらば、フウフウ、ドイドイて音すっさげて、「はい」て起きてきた。灰をほろつてフウフウ。ほして餅をアテギさぶつつけて、灰とりになぶつつけだんだど。小僧さんも賢こがったべちや。ほして、たいがい焙つたもんだはげて、

「何、和尚さま、何用だべっす」
てきた。

「何にも用ない」

「フウフウ、ドイドイて呼ばらっだはげて、和尚さまが用事あつど思つて…」
そして、

「ほうしたらばよ、和尚さまよ」

「なえだ」

「おれ、うんとおもしろい夢見たのよ」

「何夢みたんだ」

「あのな、馬きてよ、馬が跳ねだつて、跳ねだつて」

て、火箸持^たつて、小僧さん、

「こういう風にして跳ねだすだ」

て、ジュグジュグ、ジュグジュグと餅をさしたてよ。ところが火箸の先さ、餅

たくさんついた。

「ありや、餅ついた、せい」

て、ほして、ほの餅、小僧さんにみな食べらつたど。

(砂子関・工藤かなえ)

39 馬 鹿 舐

正月に嫁の家さ集まったど。娘が連てきて集まって、その時の粕漬うまくて、馬鹿舐、うまいもんだげんど、いまと食せて呉ろてもいわんねんだし、少しばり御馳走なつて止めたわけだ。

ほうして夜、夜這い入つて漬物、瓶さ入つたのさ、瓶のやつぺろり食つて、まだ足んねくて、瓶さ首つつこんで舐めた。

舐めたええげんども、瓶とんねぐなつた。んだどはあ、ほれから、仕方ない、なぜしても取らんね。ほれから便所こちだと思つて、隠つでいらんなねと思つて、便所の下さ行つて隠つでいた。

ほうしていたところが、別な舐がババたれ行つて、ババたれだげんど、尻ぬぐい無いがつたど。ほれからほこらの石拾つて、石で尻のごつた。そしてそれからその石投げたところが、かぶつた瓶さ当つたど。バエンと音して、そんで瓶割つて出はつたわけだ。

そうして二人の聾どのは、

「こういうことは黙ってで、語んねことすんべはあ」

「ほんじゃ、石で尻のごったのも、瓶かぶつてたのも黙っていんべはあ」
て、いたわけだど。

そして次の朝げ、聾どの三人も集まったもんだから、おんつあまだ、おばさまだ皆招んで、祝い始めたわけだ。ほうして座敷さいたところが、石で尻のごった聾どのは、〈鶴亀〉の話し始めたど。

そいつが〈鶴亀〉だったから、亀のこと、〈瓶〉のこと語んねこととしてあるに、
謡いで教えるつもりだと思って、

「石で尻のごった」

て、別の聾言ったど。

(砂子関・工藤 馨)

40 団 子 舂（お針の師匠さんから聞いたもの）

「正月札行ったって、団子なの一つずつなの食ってなんねんだはげなあ」
なて教えてやったどかて。

ほしたれば、へ一つずつ食ってなんねて言っだはげて、二つずつ食ったってよ。
ほして、

「何だ、兄つあ、^{なえ}団子一つばり残して、はいつぱり、みな食ったらええがんべな」
て言うたれば、

「お連れなくて食れません」
て言うたって。

（砂子関・工藤かなえ）

41 屁 た れ 嫁

嫁は真青な顔になっていっさげ、「なえだ、姉。何てかあんなだか」て言うたらば、嫁は、

「屁出たくて、おっかさん」て言うたつて。

「ほだな、屁なの、たれろちや」

おっか、ほう言うたれば、

「んだか、おっかさん、アテギさ、たずいてで呉ろ」

て言うたなて。ほして、

「アテギさなのたずかねったてええから、屁たれろちや」

ていうたれば、屁たつだれば、その嫁さまの屁あ大きくて、姑さま吹つとばさつじやど。裏板さひつっいだど。

「姉や、屁口とめでけろ、屁口とめでけろ」
ほして、

「こだな嫁、なんぼなえたてはあ、置かんねはあ、おれ見送って…」

て、家さ追出^ほしてやったど。ほしたれば、馬方、馬ひいて来^きつけて。

「ほお、こだな馬、屁で吹つとばすような馬だな」

どかて、いうたてな。その嫁さまよ。

「んだら、屁でなの吹つとばすいごんだら、吹つとばしてみろ。屁でなの吹つとばしたら、馬一頭呉^くっさげ」

て、馬引いっただ人いうたど。ほしてやっぱり屁たつて、馬一匹もらつたんだど。ほして、こんど、馬一匹もらつて、馬ひいで行^いつたれば、柿の木さ柿いっばいなたな、柿もぎし^きった人いだ^いつけて。ほしたれば、

「ほっ、ほだえして一つずつなのもぐなで、おれ屁たれ^れつど、みな一人でもげる。屁でもいで呉^くる」

どかで。

「ほだら、もいでけろ」

て、ほの嫁また屁たつたれば、嫁の屁で柿はまたボダボダとほろげだど。ほし

て馬さいっぱい柿もらって、嫁ぼだしてやらんねて、柿と馬ともらって、ぼださねで家さもどったけど。

（砂子関・工藤かなえ）

42 屁 た れ 嫁

働く嫁きたけど。お姑さまが聞くなだけな。

「なえだて、お前な顔、ほだえ青くなつて、なえだほりや」

「かあちゃん、かあちゃん、おれあ屁あ出たくて仕様ないなよ」
という。

「なんだ、なあ、屁なの出たいなら、たっだらええなよ」

「んだらば、かあちゃん、アテギさたづいてでけらっしゃい」

「なえだや、アテギさ、たぐつて呉るなて……」

「アデギさ、たづいてけらっしゃい」

お姑さま、アデギさたづいっだところあ、屁たっだていうなだねえ。お姑ばさま、吹つとばさつで、屋根裏まで飛んだ。

「嫁や嫁、屁口とめろ、屁口とめろ」

て、ほうして手木持^{てきぎ}つて行つて、尻の穴ささしてとめだ。したれば、ズズラ落つできた。ほして、

「とにかく、こだな嫁では、おれ置かんね」

て、追出さつだど。ほして、ほつから出はつて行つたところが、栗ほろぎしつたのがいだったけど。なかなか、栗ほろつけんども下手でほろがんねくて、高くて、ほれから、

「おれ、ほろつて呉つから…」

て、尻まぐつて屁たつだ。そしたら栗ほろぼろ落つだていうなだな。ほうしてえらい褒めらつで、褒美いっぱいもらつて行つたていう話だど。

褒美もらつてまた行つたれば、梨もぎしつた。ところがそこでもまたもがんね

くていたど。屁でまたほろってけだ。ほこでも褒美もらって、えらい嫁て言わっだど。そして屁で出世したんだど。

(砂子関・工藤 馨)

43 法印と医者と軽業師

法印さまど医者さまど軽業師と三人あつたけど。その人たちは突然病気で逝くなつたんだど。

最初に逝くなつたのが法印さまだったそうだ。地獄極楽の分かれ道、とことこ行く。ところが極楽さ行く道の方は立派な道で、きれいで明るくてどンドン歩く。ところが地獄さ行く道は藪やらで、やと分けて歩かんね。ゴロやらで何とも歩かんねような道だ。

そこんどこにエンマ王が居である。分かれ道さちゃんと立って、ほうして、え

え人と悪れ人、姿見という鏡があつた。これは娑婆にいたときのこと全部鏡に写る。はいつ見て、娑婆にいたときには、どういう風な生活をしていたか、何とかということ、その鏡にすっかり写るんだ。それを見て、エンマ王が裁くののだ。

ところが、ほの法印さま通りかかったところが法印さま、

「お前は何者だ」

て、エンマ王が言うわけだ。

「おれは法印で御祈祷する。家内安全、五穀豊穡、さまざまな御祈祷する法印だ」
「だまれ、お前は人をたぶらがして、世にいたときにはこういう風にしただけ」
鏡ちゃんとそこさあつて、なんぼなんぼ呉ろなて、みな現われんなだていうんだ。こういう風にしねげば五穀豊穡しねなんて言うたところが、みな現わつてるなど。

「お前は泥棒以上だ。こういうことしている。んだからお前、地獄さ行け」

止むをえず地獄さ行く道とことこと出かけた。

ところが後から来たのが医者さまだ。

「お前、何者だ」

ところが、

「わたしは医者さまで、人を生かす商売でございます」

ほうしたところが、その鏡さ、今までやってきた奴がみな現われんなだど。

「ほう、お前、医者さまだなて、何だ。医者さまは家業はええ商売だげんども、お前は何年の何月に薬をごまかして飲ませた。注射を間違つて人を殺した。さまざまなそういうことが、ちゃんとこさ現われる。エンマ王だけでなく、われ見ても分かる。いやいや、お前は極樂さ行ぐのではなくて地獄だ」

て、ほうして地獄さ追わつた。ところあ、後からきたのが輕業師、

「お前は何者だ」

ほのエンマ王に言わつた。ところが、

「わたしは輕業師で遊芸人で、人をおもしろく笑わせる芸人でございます」

「なんだ、なんだ、こりや見ろ、見ろ。ちゃんと出つた。お前はまるで人を誤魔化す商売だ。こういう商売をしてで、人をたぶらかす商売してで、人をたのしま

せるなて言うたて分んね。お前も地獄だ」

ほうして、したところが前にいた法印さま、医者さまと軽業師だ三人、

「いやいや、ひどい目に会ったな、んだらばおらだ三人、地獄さつだな」

ほうして地獄の方さ、三人とことごと行つた。ほうして行つたところが、何とすばらしい門構えだと思つたところが、ほこんどこにえらい青い鬼、赤い鬼、さまざまな鬼共だ、「ああ、きたきた」て待つてだ。

「お前がた、娑婆にいたとき、ろくな事しねえから地獄さ来た。お前がたはここさ来たつて何だから、油いりしてしまえ」

見たところが大きな釜さ油どんどん入^いつて、煮立てて、「こいつちや入^{はい}ろ」。

ところあ、すばらしい、ブクブク煮立つた釜だ。軽業は、

「いやいや、困った。こだなさ入^いつたらば死んでしまう」

ところが法印さま、

「お前だ心配するな。油湯なの、何も差支えない。おれ、早く入^いつから」

法印さま、呪文となえた。ところが今までブツブツ煮立つてだ油、すうっとし

て、ただ湯氣立っただけだ。

「はあ、みんな入ろ、入ろ」

ほうして大きな油釜の中さ、法印さま先になつてザブリと裸になつて入った。

「ああ、ええお湯だ。油湯さ入ったことない。こりや気持ちいい、さあみんな入ろ、入ろ」

ところが三人が入つてみたげんど、丁度ええあんばいだていうんだ。鬼共だ、

「ああ、火焚け、火焚け」

て、赤鬼の王さま、きやんきやんいうげんども、いくら火焚いても平氣で入つてゐる。

「こりや、こだな野郎べら、何とも仕様ない。こいつあ油で煮だつたて何ともわからね。ああ、お前だ、上がれ上がれ。お前だ、こんど劍山さやる」

て、みんなば上げて、劍の山さみんなば登らせた。ところがほれ、劍びつしり。

困ったのが法印さまと医者さまだ。

「劍の先渡られるもんでない。こりや困つたもんだ」

て言うたところが、軽業師、

「よし、おれ渡つてみる。何も差支えない」

娑婆にいたときの軽業だ。刀の先、はやしながら渡つて行く。

「いや、やるもんだ、野郎。ほんじゃまず何とも仕様ない。もつとうまい方法ないか」

「何もない」

て言うなだ。

「ほんじゃ、赤鬼の大きなの連^せてきて、飲ませてしまえ、三人ば」

て、ほうして三人呼ばつて、一人ずつ飲んだつてな。チョロン、チョロンと。

ところが医者さまだ。飲むときには齒こぼれる薬、齒さかけた。ほんで齒ぺろり欠けてしまった。んだから噛むわけに行かぬ。生き^い飲みしたんだど。ほうして中さ入った。

ところが医師さま、腹わたの構造語るわけだ。

「こりや、こいつたれつどな、マラおがるんだ。こいつ引っぱつどアクション出る。

こいつ引張つど、ほれ、引張ってみろ。これ押つけつどラツパと同じ屁出んなだ」

て、ほういうこと教えだつていうんだな。医者さまだから、一、二、三でやつてみるて、ほうして一、二、三で引張つたつて。

「わっしょ」ていうど、ブー、アクシヨ、ボギン、ブー、アクシヨ、ボギン」

ほりや。何ともかんと赤鬼はししやますして、何たて止めようない。こりや困った。ほれから、ししやますして指突つ込んで三人ば引張り出して、

「お前たちはとつても駄目だはげて、行げ」
て、追^ほつてやつたど。娑婆さ追つたつて。

(砂子関・工藤 馨)

44 股大根の由来

兄と舎弟と仲悪くて、なぜかして殺してくれんべどて、餅好きだからて、餅のときに招んだんだど。兄ばよ。兄は悟って行つたんだど。行くとき、川のどこで大根洗つていだんだけど

「一本ゆずつてけろ」

て言うたら、

「こいつ、本数かぞえて洗わせらつていんのだから、呉らんね」

て言うたげんど、股大根一本あつたけど。こいつは取つても本数減んねから、ええて呉れたど。そいつで餅食つても命拾いしたから、股大根ば神さまのオカタだて上げるんだど。

(砂子関・工藤 馨)

45 大黒さま

大黒さま、餅御馳走なつてきて、ほうして来たれば、ほこの家の娘が大根洗つていだつけど。餅食つたときには消化すんには大根おろしがええなだもな。ほんで大黒さま、そういうこと分つたために、大根洗いしつた娘のどこ通りかかつて、一本ていうたら、

「この大根、何本洗つて来いて言つだもんだから、大根一本呉つど少なくなる。んだから呉らんね」

て見だれば、股大根（まっかんだいこん）ある。その股の方、呉^けだ。ほだど数も合う。「股大根あげる」というなだけど。ほして餅ばこなしたんだど。んだから股大根ば、大黒さまのおかたていうんだ。

（砂子関・工藤盛雄）

46 酒 吞 童 子

人をだまして殺したり食ったりする鬼が大江山さいたまんだから、一に頼光、二に季武：て、六人で笏を背負って、六部のふりして大江山に登って行って、ほんどきに酒を二通りもって行って、自分たちの方は弱い酒、いくら飲んでも酔わね奴、一方は非常に度の強い奴で、寝り討ちをするという目的で、鬼を酔わせた。ほして殺してしまうのだ。

その鬼の頭をやいた灰が、みなノミになつたり、シラミになつたり虻、蜂になつたり、悪いものになった。人間の血を吸う悪いものになつたんだ。

(砂子関・工藤盛雄)

47 大工ばなし

家が不和みたいで、なかなか髯のつとめつらくていだんだど。男の人がよ。

ところがある時、大工さんが戸かき背負つてもつてきたんだど。ほして一生懸命、戸の上削り、脇削り、溝削り、一生懸命合わせて戸を立てるで、その大工さんが、

「んだ、こりや、やつぱりなあ、後から来た人は、出きないこと、あの手この手で尽くしてつとめらんねんだなあ」

て、その髯さんが感心したけつて。おれもほんではなんね。悪れどこは勤めんなねなあて、髯さん思つたけつて。

(月山沢・遠藤つるよ)

48 砂子関の狐

砂子関さ行った大工さんが、酒御馳走なってきたんだ。ほしたら大工道具を道傍さおいで、ほこのかげの沢をコチャリ、コチャリと漕いでさわいでいるんだ。ほこさ砂子関から学校さ来ている先生いんだだけ、ほの人、

「何だ、何し^{なえ}った、ほだんどこで」

ていうたら、何だか訳わかんなくて、藪の中の深いどこ、谷間深いどこ、ムシャムシャ歩くんだ。狐から化かさつだべど。

（月山沢・遠藤つるよ）

49 大淀大明神 — 四ツ谷 —

大沼に、儀左エ門というどこから、女中さんが、畑しまったもんだから、毎日、

豆植えだか何だか知しゃねげんど、畑さ来たんだてな。

して、昼間に水鏡見て、髪とかしたり、何かしたそうだと。

ある日、家さ帰って来ねななどはあ。その娘がよ。ほしてほれ、家で帰って来ねもんだから、畑さ行つてだはずだて思つて、畑さ来たわけだべ。したれば、ほの沼のどこさ、ちゃんと草履が整わつていだけそうだと。んだからほの沼さ入つてはあ、主にでもさらわつたんだべて話になつたんだと。

ほしたれば、夜に儀右エ門のどこさ枕神が立つて、

「その晩、十二時に、宝もの呉つさげ、来い」

ていうことあつたんだと。んだげんど恐つかないもんだから、儀右エ門の家では来ねでしまつたんだと。

「恐つかないし、来れば、まずわれも沼の主にやられる」

というんだべかな。

したれば、そのうち、水が破つてきたんだと。ほんどき、上の沼から主が、今の大明神の沼さ来たんだべていう話だと。

(四ツ谷・志田たまよ)

遠藤儀左エ門の家で蚕置いたとき、儀左エ門ではそこに桑取りに行ったもんだ。毎日、若衆頼んで行ったもんだ。ところがそこさ行つて下女が水鏡見て、沼の主にさらわつて死んだていうなだ。

その晩、儀左エ門のところに枕神立つたていうなだな。ほうすつど丑の刻に神さまが宝物呉^けつさげお詣りに来いていうなだど。一人でな。ところがさびしく行かんねがつたど。下の沼では四ツ谷の若衆も死んだ。儀左エ門家でも下女も死んだ。御神体は青大將だともいう。また鯉の大きな見た人もいる。一間ぐらいの大きなものだったそうだ。

(月山沢・遠藤たまの)

50 刈り上げ餅

刈り上げの餅は、ここでも何でも、九月二十九日て決めておく。

なして二十九日に決めんだかて言うずど、昔は、最上と庄内の官軍の戦いがあつたんだど。その時、二十九日に餅掲げば、何にも餅は当り前に食えんだげんど、晦日（三十日）あつたもんだから、一日遅らせで晦日に掲いたら、その軍隊に餅つるつと食わつたんだど。んだはげ、刈り上げの餅は必ず二十九日に掲こゝに決めんだど。

（砂子関・工藤かなえ）

51 狐に化かさつた話

椿沢に入道坊主あらわつたんだど。ほいつあ、狐がいて、狐が入道になって出

はっだど。郵便持ちが出会ったという話だ。

(砂子関・工藤盛雄)

52 マ キ 浏

昔、染屋さ使う灰焚きしたもんだど。今頃の暑い節でもあったんだが、暑くて暑くて、戻ってきたんだど。

「どこさ行くどご。この馬鹿野郎」
と親しみをこめて言うたど。

「川さ水浴び行くんだ」

「川泳びなら、河童には引かれんなよ」

て。ところがなんぼ待ってでも帰って来ねがったど。きて見たげんど、居ねていうんだど。たしかに入ったもんだげんど、深くて深くて沈んだもんだ。こいつ

は河童のしわざだというたもんだど。

（砂子関・工藤かなえ）

53 ば ん ば 風

昔、二月の二十五日吹く風のことを「ばんば風」と言うた。

その日に、ばんちやが川平まで吹つとばさつだんだけど。んだはげ、外さ出は
んなて言うたもんだ。

（砂子関・工藤かなえ）

54 鮭の介、今ここ通る

十月二十一日、大きなマナイタと包丁と背負って川登ってくるんだ。ほだは
げ、夜は早く眠らんねえもんだ。

「鮭の介、今ここ通るぞお」

て、登ってくるもんだ。その声聞けど、聞いた人は死んでしまうんだ。んだ
はげ、その声聞かねように早くねろて言うたもんだ。

(砂子関・工藤かなえ)

55 長いはなし

天竺からふんどし下がってきたけど。

どんびんさんすけ、さるのキンタマ、笹葉さつつんでお土産だ。

56 長いむかし

「長いむかしええが、短かいむかしええかや」

「長いなええなあ」

「ほんじゃ、むかしとんとんあつたど…」

あさって

今日ものろのろ、明日ものろのろ、明後日ものろのろ、明後々日ものろのろ…。
いつまでたつてもものろのろだて。

「ほだなざあ、ないべなやあ」て言うど。「短かいな語つて聞かせねか、おどつつあ
て言うたもんだ。」

57 果なし話

んだら、あのなあ、なえだか石垣の間から蛇あ出はったんだど。大きな蛇出はったと思つたれば、ノロノロと出はつて、

「なえだて、大きな蛇いだちや、ばんちや」て言うたら、「まだ出はつていだけ」といふど、今日もノロノロ、明日もノロノロ…。

「んでは、どんびんさんすけずだなあ」

(砂子関・悪七)

附記

昭和五十年度の山形県教育委員会の「水没地区緊急民俗調査」に戸川安章団長を中心に、清野、犬塚、江田、奥村、大友の各氏と共に調査した一部である。話者はじめ部落の方々、西川町教育委員会の方々の援助でまとめたものの資料である。今後調査に御協力下さるようお願いしたい。県教育委員会文化課の御援助に深謝いたします。

西川町の昔話

砂子関・月山沢部落

昭和五十年九月十五日 発行

編集 武田 正

南陽市三間通二三二―三

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年三月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四